

戦略としてのテキスト：ディスクロー日本 の4全国紙の社説一

鈴木, 正道

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

2007-01-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002804>

戦略としてのテキスト：ディスクール

— 日本の4全国紙の社説 —

鈴木正道

0. 序

話されたものであれ、書かれたものであれ、人が発する言葉の連なりをテキストと呼ぶとすれば、凡そテキストは、何かを誰かに伝えるために生み出される。そして受け手に何らかの作用をすることを目指す。人から人へ作用する場合、そこには力の関係が生じる。この関係が構造化し、支配と被支配の関係が成り立てば、権力となる。理念的には、(たとえば19世紀のフランスの詩人マラルメが理想とした、無としての作品のように) 誰にも何も伝えない、いわば零度のテキストも想定できるが、現実には、発話者は何かを伝え、影響を生み出すことを望んでいる。したがって、どのように伝えるかが重要になる。科学の論文を書く者は、できる限り己の価値を排して、事実を明瞭に伝えようとする。と同時に己の発見が何らかの形で、人類の幸福に貢献することを望んでいる。文学作品を書く者は、感情を伝えようとする。そして読んだ者が、心を動かされることを期待する。政治の演説を行なう者は、自らの価値とその実現のための方策を伝え、聞く者が説得されることを企図する。ジャーナリストは、事実を明るみに出し、受け手に問題意識を生ぜしめることを目指す。いかにテキストをつづるか。発話の目的が遂げられるかどうかは、このことにかかっている。意図するにせよ、しないにせよ、発話者は戦略をもってテキストをつづる。

私は、本論を2つの動機から書くに至った。1つは、受け手に何らかの作用を及ぼすことを目指すという意味での戦略という視点からテキストを分析する方法を探ることである。発話者が何らかの企図を持って、テキストをつづり、発するとき、いかなるメカニズムが働き、受け手が作用を受けるのか、あるい

は受けないのか。もう1つは、ジャーナリズムのテキストを、戦略という視点から検討し、メディア分析の方法を探ることである。マス・メディアが発達し、マルチ・メディアが登場し、メディア研究に対する関心が高まっている現在、メディア・リテラシーの教育が要請される現在、テキストとしてジャーナリズムを読み解くことが必要である。

しかし本論の試みは、限られた資料体を用い、いくらかの提案を行なうという、ごくささやかなものに留まらざるをえない。多岐多様なメディアの中でも、マス・メディアである新聞に焦点を絞ることにする。テレビに比べて受け手の動員に関して劣るとはいえ、主として文字言語に訴えるという意味で、思想的影響力はテレビに勝るとも考えられる。

まず考察の準備として、テキストの概念を見直し発展させたい。留意すべき問題を検討し、それから題材の分析に入りたい。

1. テキストとディスクール

今まで言語活動による生産物と言う意味でテキストという言葉を使ってきた。本論の目標は、戦略に基づいて価値や感情が伝えられることで力の作用する場という観点からテキストを分析することである。したがってテキストをそれ自体閉じられて自立した空間として扱うのではなく、それが生産された状況をも含めて考えることになる。その意味で、本論で分析の対象となるテキストは、むしろディスクールと呼ばれるべきであり、またそれゆえに本論の手法は、いわゆるディスクール分析に負うところが多いものとなるはずである。「ディスクール<discours>」は様々な定義が与えられてきた言葉であるが、近年は特に、ディスクール分析との関連で「生産された状況を考慮に入れたテキスト」という意味で用いられる傾向にある⁽¹⁾。この学際的な分野は、1950年代にアメリカのゼーリック＝S・ハリスが、従来の言語学が扱っていた文という単位を超えた発話を研究対象としたこと、またヨーロッパでエミール・バンヴェニストが発話行為を発話者の意図という観点から捉えたことに端を発し、1960年代から1970年代にかけて、言語学や心理学、社会学、文化人類学などがかわりあって発展してきた⁽²⁾。本論は、この学際的な分野の歴史的、系統的解説を目指すものではない。それは余りにも多岐にわたり、私の能力を超える。ただ、戦略に基づいて生産されたテキスト、つまりディスクールを分析するにあたっ

て、その成果に頼る際には、それを参照することになる。

2. 発話者の問題

書かれたディスクールには執筆者がいる。新聞の場合、匿名記事にせよ、署名入り記事にせよ執筆者がいる。複数の執筆者がいる場合にも、普通は中心になって書く者が1人いる。数人がそれなりに寄与して1つの記事を書いたならば、全員が執筆者となる。それに対して、ディスクールを語る主体としての「私」は発話者である。ディスクールの執筆者と発話者は現実には一致することもあるが、理念的には区別される。実際に書いた人間と、ディスクールにおいて語りを引き受ける主体の違いである。特に新聞や雑誌の記事のように、名目上の執筆者以外に手を入れた人間の寄与が大きい場合、執筆者自身が会社の方針に従って書く場合には、執筆者と発話者の乖離は大きくなる。いわゆる〈editorial we〉として「われわれ」や「私たち」が用いられることもある。発話者の複数性を示唆すると同時に、責任の所在が拡散する印象も与える表現である。あるいは「記者」という三人称が用いられることもある。本文中に引用された取材相手が用いる「私」もしくは「私たち」と混同されないためというのが理由の1つである。しかしまた取材をする立場の人間という面を強調し、「私」としての感情を抑え、「客観的」であろうとしていると主張する効果を持つ⁽³⁾。発話者が明示されることがなくても、ディスクールにはその存在が想定されている。

実際、発話者を表わすこれらの「私」、「私たち」、「記者」などの語が用いられることはまれである⁽⁴⁾。これは何もジャーナリズムのディスクールに限ったことではない。論文、特に科学論文で発話者が明示されることは極めてまれである。「筆者」という語が用いられることがあるが、これは「書いている人間」としての立場を強調し、対象に距離を置いていることを示す効果を持つ。論文で発話者が明示されないのは、そこに述べられている事柄が、執筆者個人ではなく一般の人々の感覚（器官）によって捉えられるべきものと想定しているからである。ジャーナリズムにおいては、発話者が明記されないことにより、受け手は自らの感覚を発話者の感覚に同化させ、結果として発話者の価値や感情を共有する傾向があると言えよう。特に新聞、週刊誌などでは、執筆者の名そのものが明記されないことが多い⁽⁵⁾。これにより、自らの存在を明らかにし

ない発話者の力は一層大きくなる。しかし同時にそれは、それぞれの新聞、雑誌の発話者の永続的責任を確立するものである。執筆者が変わったからであっても、読者は、『～新聞』は以前と矛盾したことを言っている、などと考える。署名入り記事であっても、匿名記事になれている読者は、執筆者の名を必ずしも記憶しない傾向もある。しかし逆に、発話者が「私たち」と名乗ることにより、読者が「私たち」の一人として引き込まれ、価値や感情を共有することもある。特定層に向けたメディアで、「私たちサラリーマン」などと発話者が呼びかける場合である。

3. 2006年8月16日の社説

本論では、日本の全国紙『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』、『産経新聞』の社説を分析の対象にする。社説は、「論説」として提示されながら、価値観と感情の負荷がきわめて高いディスクールであると言う点で、興味深い材料である。もちろん、数学の論理ならぬ「新聞社の公式見解」としての社説は、価値観を伝えることを目的とするから、そのこと自体が「論説」という名目と矛盾するわけではない。ただし、価値や感情の提示の仕方が、「論説」としての戦略としてどれほど有効であるかは、分析の課題となるだろう。

社説においては、論説委員の会議の結果を受けて、一人の委員が執筆を担当し、「私たち」という発話者として語る。本論では、この社説を表明する主体を「社説の発話者」と呼ぶ。以下、新聞社を代表する発話者が読者に向けた戦略的テキストという観点から、社説を分析する。

本論で扱うのは、8月16日の朝刊に掲載された、小泉首相の靖国神社参拝に関する社説である（『産経新聞』のみ「主張」と題している）。各紙が同じテーマを同じ日に取り上げたと言う点で、私は、比較検討の材料として興味深いと考えた。ただし各紙がこの問題に関してどのような立場を示しているかを批判的に解釈することは、本論の目的ではない。その立場をいかなるディスクールによって表現しているかを分析することが目的である。各紙とも、インターネットで入手したテキスト（『朝日新聞』は『聞蔵』、『読売新聞』は『ヨミダス文書館』、『毎日新聞』は『毎日 News パック』、『産経新聞』は『産経新聞ニュース検索サービス』）である。もともと社説は、どの新聞も似たようなレイアウトで提示される。さらに本論ではインターネット版を利用するため、レイアウト

トの効果は本論の分析の対象からははずした。まずディスクールの全体像を考
えるために構成を、次に価値や感情を担う指標を検討するために表現を分析す
る。さらにジャーナリズムのディスクールの重要な問題として、引用を考察す
る。

3.1 構 成

ここでは、各紙の社説がどのような側面からテーマを扱い、どのような構成
に仕立て、それが戦略的にどのような意味を持つかを検討する。以下に、各紙
の社説の、段落ごとの主題を示し、構成を紹介する。

『朝日新聞』：「靖国参拝，耳をふさぎ，目を閉ざし」（1139 文字）

8 月 15 日参拝の事実；過去 5 回の経緯と首相の説明；今回の参拝に関する
首相の説明，社説発話者の批判；15 日参拝に対する韓国，中国の反対；両国
の抗議；1 年前の首相の談話（反省と謝罪），社説発話者の批判；前日の首相
の談話（参拝の正当化），発話者の批判；朝日新聞世論調査の結果，他紙の立
場，自民党内の声，公明党の立場（参拝反対が多数）；社説発話者の首相批判；
A 級戦犯のためではないとする当日の首相発言，発話者の批判；全国戦没者
追悼式における河野洋平衆議院議長の発言，発話者の論評；8 月 15 日の首相参
拝に対する発話者の批判；6 回の首相参拝に対する発話者の否定的評価；「負
の遺産」の超克という課題。

『読売新聞』：「首相靖国参拝『心の問題』だけではすまない」（1838 文字）； 〈 〉内は小題

当日の首相の説明；8 月 15 日参拝の事実とその位置づけ；過去の参拝の経
緯；〈中国の批判にも矛盾〉中国の姿勢，首相の説明に対する社説発話者の共
感；中国の批判に対する首相の参拝後の言及；1978 年における A 級戦犯合祀
以来の大平，鈴木首相の参拝；日中関係（両首相の参拝による悪影響なし）；
中国の抗議（中曽根首相の公式参拝以来）と発話者の中国に対する否定的評価；
中国による，歴史問題の外交カード化；対韓国，中国外交に関する小泉首相の
見解；今後の対中外交に関する首相の説明不足と発話者の批判；靖国問題に関
する首相の戦略的視野に対する発話者の疑問；参拝の対象に関する小泉首相の
説明；〈A 級戦犯をどう見るか〉発話者の解釈（A 級戦犯のためではない）；A

級戦犯の認識に関する首相の国会答弁（戦争犯罪人である）；発話者の疑問（犯罪人の参拝という矛盾，A級戦犯に関する首相の説明不足）；靖国参拝と政教分離に問題なしとする首相の見解；発話者の同意；〈追悼のあり方の議論を〉自民党総裁選の焦点の一つとしての靖国問題；安倍官房長官の見解（歴史家の判断に任せる）；安倍氏自身の，参拝には言及しないとの表明，発話者の解釈（中国，韓国および自民党内の意見に配慮）；谷垣財務相の立場（首相としての参拝なし，対韓国，中国外交に配慮）；麻生外相の立場（靖国神社の改編）；富田朝彦元宮内庁長官メモ；天皇発言の真意に関する議論；追悼のあり方に関する議論の複雑化；発話者の見解（新たな戦没者追悼のあり方を検討する必要あり）；小泉首相の残した課題。

『毎日新聞』：「8・15 首相参拝 こんな騒ぎはもうたくさん」（1178 文字）

8月15日参拝の事実，首相の説明；社説発話者の解釈（首脳会談を拒否した中国や韓国への面当て）と批判；静寂であるべき終戦記念日の騒々しさ；21年前の中曽根首相の公式参拝と中国，韓国の抗議；小泉首相のこれまでの参拝；小泉首相の今回の参拝，発話者の否定的評価；首相のこれまでの説明（私的参拝）と発話者の批判；発話者の見解（現職首相の公私の分離不可能性，参拝と憲法の政教分離に関する国内の見解の対立，A級戦犯合祀と近隣国の感情）；首相の中国，韓国批判と発話者の首相批判；首相の国内世論（中国，韓国に配慮せよ）批判と発話者の首相批判；A級戦犯合祀と天皇参拝中止，国民世論の対立，発話者の首相見解批判；次期首相への参拝問題の引継ぎ；発話者の，自民党総裁選候補者への要望と感情吐露。

『産経新聞』：「8・15 靖国参拝 国の姿勢示した小泉首相」（905 文字）

8月15日参拝の事実；小泉首相の参拝の様子，公約実現としての参拝に対する社説発話者の肯定的評価；これまでの中国，韓国，および日本の一部の世論による参拝反対，首相の態度表明としての参拝と発話者の肯定的評価；終戦記念日における参拝の意義；参拝後の首相の説明，発話者の解釈（これまでの前倒し参拝に対する反省）；これまでの首相参拝に関する発話者の肯定的評価；終戦記念日以外の日（春秋の例大祭，元日）における参拝の意義；終戦記念日の参拝者の描写，発話者の今後への期待。

各紙の社説とも、それほどはっきりした構成を持っているわけではない。最も長い『読売』のみが小題をつけて、中国の批判、A級戦犯の問題、追悼のあり方と論が展開していくことを示しているが、最後の部分では主に首相候補の考えが引かれるなど、必ずしも小題と一致した内容にはなっていない。執筆者が時間に追われつつ、その日のテーマに関して書くゆえに、厳格な構成のものとはなりにくいのではないか。また読み手としても、話題のテーマに関して、ディスクールの波長に合わせて読めば、構成を意識せずとも趣旨をとらえることは容易であろう。しかし学校で、教員が社説の要約を課すと、生徒が難儀する理由の1つとして、明確な構成がないことが指摘できるだろう。

テーマとしては、『朝日』、『読売』、『毎日』ともに、参拝の事実、過去の経緯、小泉首相の見解、韓国や中国の反応、国内世論、他の政治家の見解などを取り上げている。それに対して『産経』は、同様の内容を参拝肯定の立場から扱い、さらに8月15日以外の日における参拝の意義を強調している。また小泉首相の参拝の様子を具体的に描写し、一般人の参拝客の様子も伝えている。

『朝日』と『毎日』では、ほとんどの段落に、発話者の小泉首相批判が含まれている。それと対照的に『産経』では、ほとんどの段落で、発話者の小泉首相に対する肯定的評価が添えられている。それに対して『読売』の社説では、元来の保守的な印象からはやや逸脱して、小泉首相に対する共感と批判が入り混じっている。このような発話者の両義的な態度は、靖国神社におけるA級戦犯合祀を問題視する『読売』の最近の傾向⁽⁶⁾を反映しているとも考えられる。

他方、『読売』では、富田メモの余波や天皇の真意に関する議論が言及されている。『毎日』では富田メモの名は挙げられていないが、A級戦犯合祀と天皇の参拝中止が述べられている。『産経』においては、A級戦犯に関する記述がないが、首相の靖国参拝を肯定的に捉える立場から見て当然ともいえる。それに対して『朝日』ではA級戦犯に関する首相発言が引用され、批判されているものの、富田メモには一切触れられていない。『日本経済新聞』のスクープであったことが多少なりとも影響しているかどうかは、読み手としては想像するしかない。

このように参拝に批判的な『朝日』と『毎日』では、批判的な発話を細かく組み入れるという戦略をとるのに対して、参拝を肯定する『産経』では、肯定的な発話を細かく組み入れ、さらに参拝の様子を好意的に描写するという戦略をとっている。参拝に両義的な評価をする『読売』においては、テーマごとに

批判, 肯定もしくは共感を表わしている。これが戦略的に発話者の意図した方向性であるかどうかは決めかねる。どっちつかずだと考える読者もいれば, バランスが取れていると評する読者もいるだろう。あるいは一刀両断できない問題に関する迷いが素直に表現されていると共感する者もいるかもしれない。

3.2 表 現

今度は個々の表現に目を移そう。社説の発話者が用いる表現に, どのような価値や感情が見て取れるのか。そこにいかなる戦略があるのか。日本語においては, 意味を担う最小単位としての「文節」が, 表現を考える単位として便利である。文節は助詞や助動詞も含むので, 自立語の語幹が担う意味だけでなく, それに添えられた発話者の心的態度⁷⁾も含めて考えることができる。本論ではできるだけ意味が明確になるように, 補助文節は主文節とつなげたまま挙げている。小泉首相の参拝が各紙の社説のテーマであるので, 小泉首相に関するディスクールを文節ごとに分類する。

動詞文節は, 文の(明記された, もしくは想定される)主語が小泉首相, もしくは彼の言動, 考えを指すものを挙げる。連体形は, 修飾される語を括弧内に示してある。また用法が分かりやすいように, 主語, 目的語, 引用を受ける助詞を括弧内に示したのものもある。形容詞文節及び形容動詞文節は, 小泉首相もしくは彼の言動, 考えを形容するものを挙げる。連用形では, 主語や被修飾語を括弧内に示したのものもある。名詞文節は, 小泉首相もしくは彼の言動, 考えを表わしたものを挙げる。副詞, 連体詞は, 以上の動詞, 形容詞, 形容動詞, 名詞を修飾したものである。出てきた順に挙げる。なお引用文(引用符で囲われたもの, 囲われていないが引用と考えられるもの)の中で使われている語は, 社説発話者の引き受けた表現ではないのでとりあげていない⁸⁾。

『朝日新聞』:

名詞文節:

靖国参拝/小泉首相が/参拝は/首相は/首相にしては/大ぶれ/靖国参拝を/行動だ/首相は/談話を/メッセージとの/落差は/首相は/首相の/首相は/つもりなのだろうか/首相は/理屈ではない(ことを)/首相は/首相の/参拝の/首相は/小泉政権の/締めくくりで/参拝が/行動だったと/首相の/靖国参拝は/誤りだった/「負の遺産」を/

動詞文節：

(耳を) ふさぎ / (目を) 閉ざし / 参拝した / 公約していた (8月15日を) / (8月15日を) 避けた / (と) 説明してきた / (と) 開き直った / ふれない (ことが) / (靖国参拝を) ぶつけた / (と) 受け止められかねない (行動だ) / (談話を) 出した / 反論した / 見えないのだろうか / (とでも) 言う (つもりなのだろうか) / (と) 切り捨てようと / (と) いうのか / (と) 言う / 通用する (理屈ではない) / 理解しようと / しなかった / 去る / 強行された (ことを) / (と) 見ての (行動だった) / 及んだ (靖国参拝は) / (亀裂を) 生み / (偏狭なナショナリズムを) 刺激し / (外交を) 行き詰ませた /

副詞：

まさに / あまりに / こう (反論した) / ついに / まもなく / さらに /

形容詞文節, 形容動詞文節：

朝早く / 支離滅裂である / 大きい / (私たちは) 残念に (思う) / 情けない / 重い /

連体詞：

この (メッセージとの) / こんな (参拝が) / この (「負の遺産」) /

『読売新聞』：

名詞文節：

首相靖国参拝 / 「心の問題」 だけでは / 小泉首相が / 公約を / “最後の / 参拝” で / 8月15日参拝である / 小泉首相の / 参拝は / 参拝は / 靖国参拝を / 感想なのだろう / 小泉首相は / 参拝後 / 問題と (されている点に) / 真っ先に / 首相は / 疑問を / 首相は / 「心の問題」と / 問題は / 靖国神社参拝を / 公約に / 見通しや / 戦略が / 小泉首相は / 意味だろう / 小泉首相は / 「認識」 表明である / 認識なら / 矛盾が / 首相が / 意を / 小泉首相は / 小泉首相の / 言う通りである / 小泉首相が / 課題に /

動詞文節：

(「心の問題」 だけでは) すまない / 参拝した / 果たした (形だ) / 配慮して / 繰り上げ / (8月15日を) 外した / (と) いうのは / 踏まえた (率直な感想なのだろう) / 言及した / 呈した / 説明しなかった / (と) 言う (だけでは) / 解決しない / 掲げた (際に) / あったのだろうか / (と) 述べている / (と) いう (意味だろう) / (と) 答弁している / 参拝すると / (と) いうことに /

(矛盾が) あるのではないか / (意を) 尽くして / 説明する (ことも) / 挙げた / 残した (課題に) /

形容詞文節, 形容動詞文節:

率直な (感想なのだろう) / 体系的に / なかった /

連体詞:

どのような (見通しや) /

『毎日新聞』

名詞文節:

8・15 首相参拝 / 騒ぎは / 小泉純一郎首相が / 公約実行を / 公約を / 首相の / メンツを / 面当てではないのか / 首相発言の / ぶれの / 大きさを / 信念の / 貫徹と / 意地を / 小泉首相は / 首相は / 参拝を / 自制を / 「私的参拝」と / 感情に / 外交問題と / 首相の / 私的感情では / 首相は / 詭弁には / 論だ / 小泉首相は / 置きみやげと /

動詞文節:

参拝した / (と) いう / 控えてきたのに / 振りかざして / 参拝したのは / (を) 語る (首相発言の) / (意地を) 張った (だけにも) / 見える / 承知していた (はずだ) / 続けながら / 選んできた / 放り出してしまった / 一貫して / 位置づけ / (と) いう (感情に) / よる (ものと) / 強調してきた / なっている (以上) / (私的感情では) すまない / (と) 主張している / 切り返されるだろう / (とも) 語っている / 短絡した (論だ) / (と) いう (ことだ) / 譲る / なった /

副詞:

もう (たくさん) /

形容詞文節, 形容動詞文節:

たくさん [語幹のみ] / 外交的な / 私的な (感情に) /

連体詞:

こんな (騒ぎは) /

『産経新聞』:

名詞文節:

8・15 靖国参拝 / 小泉首相 / 小泉純一郎首相は / 小泉首相は / モーニング姿

で／参拝であった／小泉首相は／当然の（ことだが）／約束を／小泉首相の／参拝日に／首相靖国参拝は／参拝後／小泉首相は／首相就任後／参拝で／反省の／思いが／小泉首相は／靖国参拝を／

動詞文節：

示した（小泉首相）／参拝した／（と）記帳し／昇殿参拝した／代表しての／（と）訴え／就任した／果たした／示した／（と）話した／（意見を）入れ／“前倒し”参拝した（ことへの）／込められている／選んで／続けてきた／（8月15日を）避けたとはいえ／参拝しても／伝えた（ことは）

副詞：

きちんと／いつ（参拝しても）

形容詞文節，形容動詞文節：

堂々とした／歴史的な／完全に

連体詞：

その（約束を）

『朝日新聞』においては、否定的な表現が目立つ。「誤り」、「『負の遺産』」という表現は、小泉首相の靖国参拝を否定的に評価するにとどまるが、「大ぶれ」、「支離滅裂」は強い表現であり、感情的な色彩も帯びる。「理屈」も「論理」や「議論」などの言葉に比べると否定的な語である。特に「通用する理屈ではない」とつながると感情的な印象も与える。靖国参拝を「当てた」という代わりに「ぶつけた」と表現することも首相の行為を乱暴であると断じた、強い表現である。「[韓国や中国が]『感情を傷つけないでほしい』と中止を望む靖国参拝をぶつけた」という場合、発話者として想定された相手方の言葉のやわらかさとの対照が際立つ。その他、韓国や中国に関しては「抑制された抗議にとどめている」など、まさに抑制された表現が用いられている。また首相に関しては「見えないのだろうか」、「言うつもりなのだろうか」という詰問調の表現も目立つ。他方、表題の「耳をふさぎ、目を閉ざし」は、首相の依怙地を、見下すかのように描いている。「残念に思う」、「情けない」は、発話者の感情を明確に表わしている。また「こんな」という表現は、「このような」に比べてきわめて感情的な印象を与えるが、字数節約という理由もあろう。いずれにせよ、ジャーナリズムの常套語である。

『読売新聞』では、批判の度合いが弱く、また感情的な色彩も薄い。小泉首

相の「A級戦犯」に関する認識と彼の参拝との間に「矛盾があるのではないか」と発話者は提起している。彼の言動を「大ふれ、まさに支離滅裂である」と断じた『朝日新聞』の発話者とは大きな隔たりがある。表題の『「心の問題」だけではすまない』の「すまない」は感情的な印象の強い表現であるが、参拝そのものを否定しているわけではない。今後の対中外交に関する「説明」がないことを批判しているのである。参拝後の首相発言に対して、発話者は「率直な感想」として共感のようなものを示す。また、中国に関しては、「姿勢は厳しくなるばかりだった」、「日本に対する外交カード」、「中国が抗議を始める」、「[中国の態度に]整合性がない」など、批判的であっても、感情負荷の低い表現が用いられている。

『毎日新聞』でも、『朝日新聞』におけると同様、否定的な表現が目立つ。表題が「こんな騒ぎはもうたくさん」という、感情的でしかも常套句的な表現から成っている。「公約を振りかざして」、「(首相のメンツをつぶした中国や韓国への)面当て」という表現も、首相の言動を乱暴だと評するものである。『朝日新聞』と同様に「首相発言のふれの大きさ」を指摘するが、それを「意地を張っただけ」と表現する点は、「耳をふさぎ、目を閉ざし」よりも感情的な印象が強い。さらに「私的感情ではすまない」として『読売新聞』と同様、「すまない」というやはり感情的な表現を用いている。それに対して、「詭弁」、「短絡した論」は、否定的であるが感情的負荷は、それほど高くない表現だと言える。また中国、韓国に関しては、「首相のメンツをつぶした」とかなり感情的な表現が用いられているが、「首相のメンツをつぶした中国や韓国への面当てではないのか」というつながりにおいて、「メンツをつぶした」とは小泉首相を発話者に想定した表現と見るべきであろう。他方、中曽根首相の公式参拝が受けた「強い抗議」は、むしろ抑制された表現だと言えよう。さらに『「特定の人に対して参拝しているんじゃない』では割り切れない」、「来年もまたこんな騒ぎを繰り返すのは、もううんざりだ」の、「割り切れない」、「うんざりだ」は、社説の発話者が主語として想定される（従って上には挙げていない）極めて感情的な表現である。しかしこれらの表現は、むしろ主語を明記しないで使われるのが普通である。これによって、読者が発話者の感情に引き込まれやすくなると言えよう。この効果は、「すまない」に関しても当てはまるが、「すまない」では「靖国参拝」が主語として想定される。

『産経新聞』では、発話者は小泉首相の靖国参拝を評価しているため、否定

的表現は見当たらない。しかし同時に、「堂々とした歴史的な参拝」、「その約束を完全に果たした」、「きちんと示した」という表現は、積極的な評価を明らかに示すが、それほど高揚した印象を与えない。ただし首相の「モーニング姿」、「記帳」、「昇殿参拝」を描写することで、「堂々とした」首相の姿を読む者に髣髴させようという戦略はうかがわれる。結局、首相の参拝を「当然のこと」とみなす発話者にとって、はしゃぎたてることではないのだろう。その一方で中国や韓国は『『反対』の大合唱を繰り返し』ているとされ、また「日本の一部のマスコミや識者」はそれに「便乗」してきたと評されている。そして中韓の行為は「内政干渉」とみなされている。いずれにせよ、否定的で、見方によっては感情的でもある表現だが、マス・メディアの常套句でもあるだろう。

4紙のうち、『朝日』と『毎日』がもっとも感情的で強い表現が目立つように思われる。また『毎日』が、より常套句的であると言えよう。『読売』の場合は、論の方向性に関するためらいが表現にも反映されているようである。『産経新聞』では、当然とみなす行為を評するので、感情的色彩は薄い。不満である場合のほうが、感情的な表現は目立つものである。発話者が明記されているのは、『朝日』の「私たちは残念に思う」という、終りに近い1箇所だけである。これによって、発話者が、小泉首相参拝に下す否定的評価を明確に引き受けていると解釈できる。『朝日』の前半、および他紙の全体においては、発話者が明記されないことにより、読み手が引き込まれやすいと言える。しかし余り感情的な表現がくどいと、読み手によっては反発、少なくとも違和感を持つこともあり、戦略的には逆効果となりうる。

3.3 引 用

引用は、臨場感を与えるために、また執筆者が自分の論拠を示すために用いる有効な手段である。特にジャーナリズムの記事では引用が多く用いられる傾向があることは周知の通りである。元来、引用符でくくられた「引用」とは、引用元を「そのまま」引いたものとして示される。引用元の発話を書かれたものである場合は、引用符による括り方に規則がある（原則として元の文を変えない。文脈に合わせて単語を補ったり、人称や動詞の形を変える場合にはその部分を鉤括弧で括る、など）。しかし元の発話が口頭である場合には、長い話を縮め、繰り返しを整理し、分かりにくい部分を言い換えるために、引用者が適当に切り貼りをしたり、語句を変えることがある。特にジャーナリズムにお

いては、複数の文を一つの文に縮めることが頻繁に行なわれる。このような作業により、引用として示されたディスクールの与える印象が、元のディスクールの発話者自身が意図したこととずれてしまい、トラブルに発展することもある。いずれにせよ、どの発言を、どの範囲にわたって、引用者のディスクールのどの部分に引用するかは、引用者の選択にかかっている。また引用した節をどのような主節で受けるか（特にどのような伝達動詞を用いるか）によって引用者の意図が示される。

4紙の社説では、小泉首相の参拝後の発言の中で、15日参拝に関する部分が引用されているが、それぞれの表現がやや異なっている。テレビでは、これらの引用の元となったと考えられる当日の会見の様子が報道された⁽⁹⁾。4紙における引用と、引用元と推定される部分を比較してみたい。以下にそれぞれの引用を示す。言うまでもなく口頭の会見の発話の文字化は、小泉首相の語り口を「完全に」再現するものではありえない⁽¹⁰⁾。

テレビ朝日『報道ステーション』：「8月15日を避けてもいつも批判、反発、そして何とかこの問題を大きく取り上げようとする勢力、変わらないですね、いつ行っても同じです、ならば今日は適切な日ではないかなと（カット）」

『朝日新聞』：「15日を避けても、いつも批判、反発し、この問題を大きく取り上げようとする勢力は変わらない。いつ行っても同じだ」

『読売新聞』：「8月15日を避けても、批判、反発は変わらない。いつ行っても同じだ。ならば今日は適切な日ではないか」

『毎日新聞』：「いつ行っても批判、反発がある」

『産経新聞』：「多くの人が15日だけはやめてくれと言うから、避けて参拝したが、いつ行っても混乱させようとする勢力がある。いつ行っても同じなら、きょうは適切な日ではないか」

『朝日新聞』においては、引用は「開き直った」という動詞で受けられており、発言は「大ぶれ」、「支離滅裂」と形容されている。これらは、かなり強い調子の否定表現である。また、「今日は適切な日ではないか」という首相の判断の部分を省き、「批判、反発して問題を大きく取り上げる勢力が変わらないからいつ行っても同じ」という、より感情的な不平の部分を残すことにより、

「開き直り」という表現の採用を正当化していると言えよう。

『読売新聞』では引用が冒頭で単独に据えられ、これを受ける動詞がない。その後首相の靖国参拝の事実が述べられ、中国側の批判と続くが、参拝に関する社説発話者の明確な批判、支持を表わす表現が見当たらない。「いつ行っても同じ」という言葉を、過去の参拝を踏まえた「率直な感想」としてささやかな共感を示すのみである。このささやかな共感は、「この問題を大きく取り上げようとする勢力」という、読み手によっては反発を惹き起こしかねない部分を省略することにも現れているのかもしれない。

『毎日新聞』の「いつ行っても批判、反発がある」と言う引用は、4紙の中で最も短い。この素っ気ない引用が、「放り出す」という動詞の含む投げやりな印象と呼応している。「発話を通して現れる発話者の人格、個性」をエトスとするならば⁽¹⁾、このディスクールは、社説発話者による首相発言の要約の仕方（発話）と社説発話者の下す評価（発話者の人格、個性）が一致するという意味でエトスを成している。

『産経新聞』の引用は長い。テレビにおける表現とはかなり異なっている。この引用のとおり発言した部分が他にあったとは考えにくい。「多くの人が15日だけはやめてくれと言うから」、「混乱させようとする勢力」というのは、他の部分、もしくは他の会見で小泉首相が用いた表現かもしれないし、社説の発話者が要約として考え出したものかもしれない。いずれにせよ、これらの表現は、小泉首相の強い感情を印象付けるものである。小泉首相を批判する文脈で用いても、彼を支持する文脈で用いても、読者に強い印象を与えるだろう。しかしこの引用は、「話した」という、最も「中立的」で感情的負荷の低い動詞で受けられている。『産経』の社説の発話者は、小泉首相参拝を当然のことと受けとめ、それに満足している。従ってさらに感情の込められた伝達動詞で受けて、引用を意味付ける必要はないのである。感情的な表現を重ねると逆効果である。

ところでどの引用もいわゆる敬体でなく、常体で書かれている。人と話す場合、特にインタビューや会見などでは、人は一般に敬体を用いる。ところどころ口調のはずみや、また他の人の発話を引用する場合などに常体が混じりこむことがある。ジャーナリズムの記事では、短くまとめるために常体に書き換えることが多い（ただし引用された発話の口調を伝えたい場合には実際に用いられた敬体を残すこともある。あるいは逆にざっくりばらん口調として常体を残

すこともある)。しかし文脈によっては、常体か敬体かで、引用された発話の与える印象が変わってくることもある。一般には、常体のほうがより、断定的、場合によってはぶっきらぼうな印象を与える。

首相の参拝に批判的な『朝日』の場合、常体表現が「～と聞き直った」と言う伝達表現と結び付くと、極めて断定的な印象を与える（もっとも小泉首相の敬体表現に、却って独特の押し付けがましさを感じる人もいるかもしれないが）。さらに『朝日』には、「首相は『A級戦犯のために行っているんじゃない』と言う」というくだりもある。「いるんじゃない」という表現はいかにも口語調であり、「そのまま」であるかのような印象を与える。しかし『報道ステーション』およびフジテレビの『ニュースジャパン』によると「私はA級戦犯のために行ってるんじゃないですよ」となっている。新聞だけを読んだ者は、高飛車な印象を受けるのではないだろうか。

『読売』では、冒頭に、引用のみを、伝達動詞で受けることなしに据えていることが、敬体から常体への変換による断定的な印象を強めていると言えよう。さらに口頭では「ならば今日は適切な日ではないかな」と語尾に留保が含まれているのに対して、引用では「ならば今日は適切な日ではないか」となっている。切りよくまとめるために意味を変えない助詞を省いたのであろうが、結果として発話是一种の修辞疑問となり、断定調が強くなっている。しかし伝達動詞の不在は、むしろその後の展開に読み取れる、発話者の判断留保を予告しているようにも考えられる。

発言を極めて短く要約した『毎日』の場合は、実際の発言とすでに大きく隔たっているから、敬体で臨場感を出すことはありえないと言えよう。また首相の行為のぶっきらぼうさ、いい加減さを提示したいのであるから、常体で表わすのは当然であると考えられる。

『産経』でも、長いとはいえ、様々な箇所から寄せ集めた「引用」であるから、敬体を用いるには違和感があるだろう。しかも首相の行動を支持するのであるから、常体を用いても、否定的な印象を与えることがないのである。『読売』の場合と同じく「今日は適切な日ではないか」と、文末の助詞を省いているが、参拝に好意的な全体の論調のため、断定調はそれほど強まっていはいないと思われる。

最後に、引用ではないが、引用であるかのごとく、読者に思わせる効果のある部分を指摘しておく。『朝日』の、「首相は、こうした声をすべて中国や韓国

に媚びる勢力とでも言うつもりなのだろうか」において、「媚びる」は極めて印象の悪い語である。発話者は、小泉首相がこの言葉を使ったとは言っていない。媚びるとでも言うつもりなのかとただすことで、あたかも小泉首相がそのように言ったかもしれないと読み手に思わせる効果がある。

多くの場合、口頭の発話を元とするジャーナリズムの引用において、切り貼りや要約、語句の変更が行なわれるのは当然とも言えるが、読み手は必ずしもそれに注意を払っていない。引用者は、意図して、もしくは意図せずに「引用」の与える印象を自分のディスクールに合わせて作り上げる。小泉首相のようにテレビを含めて引用されることの多い公人の場合、受け手は、様々な例から印象を修正する⁽¹²⁾。しかし「一般庶民」となれば、引用者が紹介する生身の人間として受けとめられやすい。本論では引用符付きのものに焦点を当てて論じたが、引用符なしの引用（西欧語では、間接話法にあたるが、時制の一致、人称による動詞活用の変化のない日本語では余り明確に定義できない）では、引用者による変更の問題が一層明確になる。発話者が戦略を展開する手段としての引用に関する倫理を考える必要があるだろう。

4. 結 論

以上、4つの全国紙の社説を、構成、表現、引用という視点から比較分析した。『朝日新聞』、『毎日新聞』では、小泉首相を批判した感情的で強い表現が随所に入れられ、引用された首相の発言も高圧的もしくは投げやりな印象を与える。社論の方向性に迷いを示す『読売新聞』では、批判、共感が入り混じり、引用も宙に浮いたようになっている。『産経新聞』では、首相の参拝が平板な表現で肯定的に描写され、首相の主張をできるだけ詰め込んだような引用が添えられている。勿論、これらは、特定の日の、特定のテーマに関する社説であり、これをもって4つの全国紙の全般的な特徴を判定することはできない。ただ、同じ日における、同じテーマに関する4つのディスクールを比較することによって、ジャーナリズムのディスクールにおける戦略、もしくはディスクール一般における戦略を読み取るための方法論のたたき台を提案したいと私は考えたのである。

結局、各紙の「戦略」に関しては、結論というよりも、新たなる問いがいくつも生じた。『朝日』や『毎日』の社説の発話者が、強い調子で首相の靖国参

評を批判しているならば、それは読者に対する影響と言う点から戦略的に有効であるのか。あるいは商業的に見て得策であるのか。感情がこもったディスクールは、人によっては共感を呼ぶが、別の人の反感を買うこともある。影響力があるからといって、売上部数が増えるとも限らない。特に『朝日』との差異化を図りたい『毎日』の社説の発話者がとりわけ感情的でありながら、常套句的な表現に訴えることは戦略的にいかなる有効性があるのか。発行部数が日本最大である『読売』の社説の発話者が方向性のためらいを見せた場合、それは読者にどう受けとめられるのか。首相の行動をそれほど強い感情を表わさずに肯定する『産経』の社説の発話者は、販売体制の弱い日刊紙としてどのような戦略を考えているのか。

他方、表現が感情的であるかどうか、またどれほど感情的であるかは、結局私自身の印象に基づいている。語彙もしくは語彙の連鎖の感情負荷を、統計に基づき数値化するという方法も考えられないわけではない。しかし心理的印象に関するアンケートは、設問の表現、被質問者の解釈やその時点での心理状態、被質問者に伝えられるアンケートそのものの位置づけにより大きく作用されるので、どれほど信頼がおけるのかという点で大きな問題を残す。これは感情を「客観的に」量ることができるのかという問いに帰着する。

*

発話者が単数もしくは複数の受け手に向けてディスクールを発する時、どのような表現をどのように組み立てるのか。発話者は戦略を必ずしも意図しているわけではない。意図せずに、ある定型表現を用いることは多い。特に執筆者が、会社という枠組みの中で、同僚、上司との関係において発話者として語る場合、制度化された戦略に縛られている（自らを縛っている）としたら、あるいはその制度に反抗しつつ語るとしたら、このメカニズムをいかに明らかにできるのか。この戦略としてのディスクールを受け取った者が、さらに自らのディスクールを組み立てる場合、やはり何らかの戦略に訴えるとしたら、その連鎖としてのメカニズムをいかに明らかにできるのか。そもそも「署名」とは一致しない、いや匿名の「私」として語る、いやさらに主体なき主体として語る発話者とはいかなる（権）力をもった者なのか。その（権）力への執筆者自身の欲望とはいかなる指標をもってディスクールに現れているのか。発話者の欲望

と執筆者の欲望が衝突したら、それはいかなる病の徴候として表現されるのか。これは、本論の発話者が執筆者としての私、発話者としての私を含めて、広く本論の読み手に投げかける問いである。

《注》

- (1) エミール・バンヴェニストは、ディスクールを「話し手と聞き手を前提とし、また話し手が何らかの方法で相手に影響を与える意図を持つことを前提とする、あらゆる発話〈énonciation〉」と定義づけ (Émile Benveniste, *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, 《Tel》, vol. 1, p. 242), ロラン・バルトは、「内容から見て統一され、二義的なコミュニケーションを目的として発せられ、かつ構成され、言語以外の要因によって文化を担わされた、言〈parole〉のあらゆる確定されたまとまり」 (Roland Barthes, 《La linguistique du discours》, *Signe, langage, culture*, Mouton and Co. 1970, repérés dans *Œuvres complètes III 1968-1971*, Seuil, 2002, p. 612) としている。またミッシェル・フーコーは、「同じディスクールの形成体〔発話グループ〕に属する限りでの発話の集合」 (Michel Foucault, *L'Archéologie du savoir*, Gallimard, 1969, 《Bibliothèque des sciences humaines, p. 153) と定義づけている。またディスクール分析の分野で活発な活動を行なっているドミニック・マングノーは、ディスクールを「社会的および歴史的生産条件に基づく類型に属する、文を超えた構成体」 (Dominique Maingueneau, *Initiation aux méthodes de l'analyse du discours*, Hachette, 《Hachette Université》, 1976, p. 20.) と定義している。
- (2) Cf. Dominique Maingueneau, *Initiation aux méthodes de l'analyse du discours*, 前掲書, p. 7; 橋内武, 『ディスコース——談話の織りなす世界——』, くろしお出版, 1999 [2004], p. 3. なお、この分野を「談話分析」と訳すこともあるが、「ディスクール」を「発話状況を考慮したテキスト」と定義するなら、「談話」という訳語は適切でないとは私は考える。また、アメリカ系統の研究者たちは「ディスコース分析」〈discourse analysis〉と称している。本論では、主にフランスの研究者たちに負うところが多いので、「ディスクール分析」という語を用いる。
- (3) 週刊誌などでは複数主体として「小誌」という表現がよく使われる。「私たち」よりも、「取材機関」としての立場を強調し、「記者」よりも発話の責任を拡散させる表現である。
- (4) 例えば、本論で扱う、2006年8月16日の4つの全国紙における各語の使用件数は以下の通りである。「外部」は、引用、インタビュー、表題の中で使われたもの、外部執筆者によって使われたものなどを指す。「内部」は社員記者が発話者としての自分を指したもの。「記者」に関しては、「私たち」の代用であるものは()内に示した。(?)は、発話者自身を指すのか「私たち」の代用か記者一般を指すのか判断しかねるものである。全紙とも、朝刊および夕刊のインター

ネット版（後述）で、全国版、地方版双方を含む。

	私：外部	私：内部	私たち：外部	私たち：内部	記者
朝日	132	6	37	1	5
読売	69	2	21	0	1(?)
毎日	120	10	28	1(?)	11(?) / 2(私たち)
産経	47	4	1	0	1(?)

- (5) 『毎日新聞』では、署名入り記事が原則となっている。これは、会社の戦略として、記者の息遣いをより身近に感じさせようとする狙いの他に、執筆者名を出すことで、個人の責任が大きくなるのを厭う傾向に抗して、新聞としての差異化を図る方針によるものと言えよう。
- (6) Cf. 『読売新聞』, 2005年6月4日社説, 「靖国参拝問題 国立追悼施設の建立を急げ」; 『論座』, 朝日新聞社, 2006年2月号, 「渡辺恒雄氏, 朝日と『共闘』宣言」(渡辺恒雄『読売新聞』主筆と若宮啓文朝日新聞論説主幹の対談)。
- (7) いわゆる *modality* (英語), *modalité* (フランス語) と称される概念である。欧米語圏で始まった研究分野であるが、構造の異なる日本語や他の言語についても研究が進んでいる。この概念は、研究者によってかなり異なった定義が与えられているが、大方のところ、「発話者が、伝える内容(命題)に関して持つ主観的態度の表現」とされており、助動詞、判断、感情を伝える動詞、副詞などの指標を持つ節に認めるのが一般的な考え方である。本論では、発話者の価値判断、感情を広く扱うことを目的とするので、特に指標のない断定表現も含めて検討する。従って *modality* の研究成果を参考にしつつも、その概念枠とは必ずしも重ならない領域で分析を行なう。日本語と英語の *modality* の定義、分類の比較に関しては例えば、cf. 湯本久美子, 『日英語認知モダリティ論——連続性の視座』, くろしお出版, 2004, p.11. また指標のない断定表現に *modalité* を認める立場に関しては以下を参照のこと。フランス語に依拠しているが、日本語にも適用できる考えである。Cf. Nicole Le Querler, *Typologie des modalités*, Presses Universitaires de Caen, 1996, pp. 51-52.
- (8) しかし「引用」であっても、社説の発話者が自らの表現に置き換えている場合は、発話者の表現とみなされるべきである。ただしそれを確定することはできないことが多いので、本論では引用における表現は除外する。
- (9) 言うまでもなく、テレビが、初めから終わりまでの模様をカットなしで流すことはまれであるし、局によって放送している部分が異なるのが普通である。また口頭の発言であるから、繰り返しがあって、場合によっては、テレビでは放送されない、同じ内容の異なった部分から新聞が引用する可能性も排除できない。しかしこの記者会見に関しては、4紙の引用とテレビの相当部分の類似性から、4紙がテレビで放送された発言の同じ部分を元に行っていると前提できると私は考える。

- (10) ディスクール分析による、音声記録の文字化に関する工夫については例えば、cf. 橋内武, 『ディスコース——談話の織りなす世界——』, 前掲書, 第5章「データの収集と文字化」.
- (11) Cf. Maingueneau, Dominique, *Analyser les textes de communication*, Armand Colin, 《Lettres sup》, 2005, [Dunod, 1998] p. 79. エトスのディスクール分析への応用に関しては, cf. 同書, pp. 77-84.
- (12) これによって小泉首相の「真の姿」に近づくことができるなどという、ナイーブなことは言うまい。多くの人々が様々な「修正」を経て作り上げたイメージも、限りなく差延されるはずのイメージに過ぎない。

(フランス文学, 思想・経営学部助教授)